

広域ブロック毎の自然環境の特性

1. 北海道

(1) 位置および面積

北海道はわが国の最北部に位置し、西は日本海、北東はオホーツク海、南東は太平洋の3海域に囲まれている。総面積は83,452 km²で、わが国総面積の約22.1%に相当する。

(2) 地質・地形・気候

北海道は、島嶼の延長方向に長くのびる本州や四国、九州とは異なり、東西南北の四隅が突き出た形をしている。日本海側の石狩海盆から石狩低地帯を通り、日高舟上海盆に抜ける幅の広い凹地帯によって、東の胴体部分と南西部の半島部に大きく二分されている。胴体部には南北にのびる地質構造や地形のかたまり、凹地列と、それらと斜交する千島弧―千島海溝の影響を受けた地質構造、山脈などの地形的高まり、火山列、構造盆地などが配列している。半島部は東北日本弧の延長で、細かく分かれた山地・凹地や新旧の火山が多数分布している。

北海道の気候は、年平均気温5～10℃、年平均降水量800～1,800mmであり、他地域に比べて冷涼・少雨である。特に冬期には、最寒月の月平均気温が0℃以上になるところはない。

(3) 植生

北海道は、高緯度で寒冷な気候であることから、ミズバショウが低地で見られるなど、本州と比較して低い標高のところから亜高山性植物や高山性植物が見られる。また、夕張岳のユウバリコザクラ、日高山脈アポイ岳のエゾユウゾリナ、礼文島のレブンアツモリソウ、利尻島のリシリヒナゲシなどの多くの固有種がある。また森林は天然林が7割を占めており、わが国の温帯を代表するブナが北海道南部の渡島半島（黒松内低地帯まで）に分布する。この低地帯より北では、エゾマツ、トドマツに代表される針葉樹とシナノキ、ミズナラなどの広葉樹が混じり合う針広混交林が主体となっている。

北海道の中での植生区分別の出現頻度構成比をみると、植林地・耕作地植生が37.9%と最も高く、次いでブナクラス域自然植生(33.2%)となる。亜寒帯・亜高山帯自然植生(13.8%)の構成比が他圏に比較すると高いのが特徴である。全国の亜寒帯・亜高山帯自然植生に対する構成比をみると、その68.7%が北海道に集中している。大雪山系、日高山脈、知床半島、阿寒、恵庭岳周辺等の山岳地帯には、亜寒帯・亜高山帯自然植生が大面積に分布しており、これらの山頂部には、寒帯・高山帯自然植生も分布している。全国の寒帯・高山帯自然植生と比較してみると52.0%が北海道に残されていることになる。河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生は全国の41.7%が北海道に集中している。中でも湿原植生は、我が国最大の湿原である釧路湿原をはじめ、サロベツ原野、雨竜沼高地などに分布している。

次に北海道に占める自然林、二次林、植林地のまとまりの割合をみると、北海道は44.4%と平均よりやや高い値であるが、自然林、二次林のまとまりの割合は21.9%と最も高い。

(4) 動物分布状況

北海道は大陸とのつながりが長く続いたために、北方要素の強い独自の動物相が見られる。

哺乳類としてはヒグマ、エゾシカ、キタキツネなどが代表的であるが、そのほかにも様々な動物が生息する。山岳地帯には氷河期の遺存種といわれるナキウサギをはじめエゾシマリス、エゾオコジョなどが、森林や平野部にはエゾクロテンやイイズナ、エゾユキウサギ、エゾリスなどがみられる。また、森林や湿原など多様な野鳥の生息環境が残されており、渡り鳥の渡来地や繁殖地にもなっている。国内では北海道だけでみられる主な鳥として、タンチョウ、シマフクロウ、エゾライチョウ、エトピリカ、ウミガラスなどがあげられる。

大型哺乳類等の分布を見ると、クマ類（ヒグマ）、ニホンジカの分布が確認された区域の割合が大きい。

(5) 土地利用現況

道全体に占める面積割合をみると、森林・原野の占める割合が 68.9%と最も高くなっている。また森林の所有形態をみると、国有林が全道森林面積の 57%を占めているのが特徴的である。

農用地面積は、道全体の 14.7%を占めているが、全国の 25.0%を占める耕地面積を生かし、主業農家を主体に大規模で生産性の高い農業を展開している。

(6) 法規制

北海道には自然公園が 23 箇所（864,47ha）あり、総面積の 10.4%を占める。また自然環境保全地域は 7 箇所指定されているが、このうち遠音別岳、十勝川源流部の 2 箇所は原生自然環境保全地域の指定を受けている。このほかにラムサール条約登録湿地として 12 箇所（35,015ha）が指定されている。

2. 東北圏

(1) 位置および面積

東北圏は本州の最北部に位置し、西は日本海、東は太平洋に面している。総面積は 79,469km²で、わが国総面積の約 21.0%に相当する。

(2) 地質・地形・気候

東北圏は、南北方向にのびる大地形の配列が明瞭な、典型的な島弧—海溝系を形成しており、その地質構造も、島弧と平行な多くの共通点を有している。東北圏の地形区は地形配列をもとに、北上・阿武隈山地、奥羽山脈、出羽・飯豊山地の3つに分けられる。

北上・阿武隈山地は、第四紀火山の見られない古い基盤岩と、それを貫く花崗岩類から構成されている。新生代以降、両山地ともに山地周辺部を除いて陸域であったため、現在なだらかな高原状の山地が広い面積を占めている。外弧山地と奥羽山脈との間には、北上・阿武隈両河谷沿いに南北に連なる低地が存在する。奥羽山脈は、一続きの隆起脊梁山脈と考えられており、活発な火山活動を続ける火山が多い。出羽・飯豊山地は、東北圏で最も遅く第3紀末ころまで海域であった、比較的新しい陸域である。奥羽山脈と出羽山地の間に連なる盆地群と、日本海側の低地からなりたっている。

東北圏の気候は、日本海側は冬季に豪雪に見舞われる日本海側気候区であり、太平洋沿岸地域は夏の南東の季節風の影響で、夏の降水量が多くなる太平洋側気候区である。他に特徴的な現象として、夏季に流れ込む冷たく湿った北東風「やませ」があり、冷害の要因ともなっている。

(3) 植生

東北圏は、奥羽山脈を中心とした高山帯から高地帯、盆地帯、低地まで標高差があることと、日本海側、太平洋側でそれぞれの気候の影響を受けることから、多様な植生タイプがある。

東北圏の植生区分別の出現頻度構成比をみると、約半分にあたる 45.7%が、植林地・耕作地植生である。自然植生の大半を占めるブナ林を主体とするブナクラス域自然植生は 13.4%を残す程度で、下北半島、白神山地、十和田湖、八甲田山、八幡平、森吉山、栗駒山地、船形山、月山、朝日岳、飯豊山地、裏磐梯などにまとまって分布するが、その分布域は限定されてきている。一方、ブナクラス域代償植生は 23.5%あり、阿武隈山地や奥会津地方などに広く分布し、全国で最も高い割合を占めており、自然植生の割合を大きく上回っている。寒帯・高山帯、亜寒帯・亜高山帯の植生は 1.7%分布するが、高海拔地域に限られることから中部圏 (6.3%)、首都圏 (3.2%) と比べて構成比が小さい。ヤブツバキクラス域の植生は少なく、特に自然植生は陸中海岸から南三陸にかけての太平洋岸と日本海岸の一部に 0.5%が点在するにすぎない。ヤブツバキクラス域代償植生が北上山地を中心に比較的広範囲に分布しているが、その主体はアカマツ林及びビコナラ林である。

また東北圏に占める自然林、二次林のまとまりの割合は 14.1%と低いが、植林地を加えると 42.5%と高い値になる。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類等の分布を見ると、クマ類（ツキノワグマ）、カモシカの分布が確認された区域の割合が大きい。またイヌワシやクマタカなどの猛禽類の生息が確認される区域の割合も大きく、動物の生息・生育環境として重要な地域といえる。

(5) 土地利用現況

森林・原野の占める割合が70.5%と、四国圏、中国圏、中部圏について高い。林業では自然林が多く残り、秋田スギや津軽ヒバは良質なこと知られている。

また東北圏は水稲作付面積が全国の33.1%を占める米作地域である。

(6) 法規制

東北圏には、自然公園が89箇所（1,121,958ha）あり、総面積の14.1%を占める。また自然環境保全地域は127箇所指定されている。このほかにラムサール条約登録湿地が4箇所（1,280ha）指定されている。

3. 首都圏

(1) 位置および面積

首都圏は本州中央部に位置しており、太平洋に面する。総面積は 36,886km² で、わが国総面積の約 9.8%に相当する。

(2) 地質・地形・気候

首都圏は、地形的には東北日本弧と伊豆・小笠原弧が接する狭角に位置する。わが国最大の関東平野と、その西側、北側をとりまく山地、および南側の三浦・房総半島の丘陵ないし低い山地から構成される。富士・八ヶ岳・妙高と続く火山列の地帯の両側には飛騨・木曾・赤石など日本で最も高い山がある。関東平野はほぼ水平に堆積した新第三紀・第四紀の地層からなるが、三浦半島、房総半島中南部は断層・褶曲を受けた新第三紀層からなる。また関東平野は、台地・低地と周辺の丘陵からなっており、台地の占める面積が広い。

首都圏の気候は、太平洋側の気候である。沖合に暖流の黒潮が流れているため、温暖である。夏には、太平洋からの季節風の影響で雨が多く、冬には日本海からの季節風が山脈で遮られるために乾燥しており、晴れの日が多い。また栃木県や埼玉県西部などの山地は、内陸性気候に区分され、雨が少なく、夏と冬、昼と夜の寒暖差が大きい。

(3) 植生

首都圏は、比較的自然林等を残している山地山麓部、雑木林や農地、崖線部などにモザイク状の緑地が残る丘陵・台地、斜面樹林や河川敷などに小規模な緑地が点在する低地に区分できる。

首都圏の植生区分別の出現頻度構成比をみると、植林地・耕作地植生の占める割合が九州圏、四国圏に次いで高く 54.1%となっている。関東平野周辺部の山地帯には自然植生が分布しており、利根川源流部を含む三国山脈にはブナクラス域及び亜高山帯の自然植生が広く分布しているほか、これに隣接する奥日光にも同様の植生が分布している。ヤブツバキクラス域自然植生の分布域は限定され、わずかに 0.5%が残されているのみである。ヤブツバキクラス域代償植生は 12.0%あり、植林地・耕作地植生、その他に区分される市街地・造成地等に次いで多い区分である。

首都圏に占める自然林、二次林、植林地のまとまりの割合をみると、28.2%と沖縄に次いで低い値をとる。また自然林、二次林のまとまりも 5.6%となっており、まとまった森林は少ない。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類や、猛禽類の分布が確認される地域は少ない。小笠原諸島は大陸から隔絶してきたため、独自の進化を遂げた固有の動植物種が多い。

(5) 土地利用現況

首都圏においては、農用地の割合が 18.9%と沖縄に次いで大きい。水稻の作付面積も全国の 16.2%を占め、東北圏に次いで大きい。

(6) 法規制

首都圏には、自然公園が 65 箇所 (722, 237ha) あり、総面積の 19.6%を占める。自然公園の中では国立公園の占める割合が大きい。また自然環境保全地域は 196 箇所指定されており、このうち南硫黄島は原生的自然環境保全地域に指定されている。自然環境保全地域の占める割合は 0.7%と最も大きい。このほかにラムサール条約登録湿地が 3 箇所 (9, 011ha) 指定されている。

4. 北陸圏

(1) 位置および面積

北陸圏は、本州のほぼ中央に位置しており、日本海に面する。総面積は 12,620km² で、わが国総面積の約 3.3%に相当する。

(2) 地質・地形・気候

北陸圏は、飛騨帯とよばれる基盤岩類の地帯に分類される。飛騨帯は 10～20 億年前の先カンブリア時代以後、何回かの変成作用を受けて生じた高温低圧型の変成帯であり、各種の片麻岩とそれを貫く花崗岩類からなっている。

北陸圏は、白山をピークとする山地から日本海側に向けて、起伏の激しい山地・丘陵が発達している。これらの山地・丘陵地はおもに中新世の火山岩とそれ以降の海進堆積物からなっており、この地層は丹生山地から能登半島の付け根まで分布する。一方、福井平野や大野盆地、金沢平野等の沈降盆地も分布しており、差別的な隆起と沈降に特色付けられる。

北陸圏は日本海側気候区に属しており、冬季の降雪量が多い。

(3) 植生

北陸圏は、対馬暖流と冬期の季節風による多量の積雪の影響を強く受けるため、標高差による植生の変化に加えて、海岸の暖地性の植物から、山岳地帯の寒地性植物まで多様である。日本海沿岸の島や社叢ではイノダテタブ群集やヤブコウジースタジイ群集を主とする照葉樹林が分布し、低山帯はクロマツ林に続いてアカマツ林やコナラ、クリなどの二次林となっているが、近年は植林が進み、その大部分はスギ林となっている。また山岳地帯はオオバクロモジープナ群集などの夏緑樹林となっている。

北陸圏の植生区分別の出現頻度構成比をみると、植林地・耕作地植生が 37.2%と最も多く、次いでヤブツバキクラス代償植生が多い。自然植生の割合も 16.7%と、北海道、沖縄県、東北圏に次いで高い。

北陸圏に占める自然林、二次林、植林地のままとまりの割合をみると、46.8%と高い値であり、自然林、二次林のままとまりの割合も 20.6%と北海道に次いで高い。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類や猛禽類の生息が確認される区域の割合は少ない。

(5) 土地利用現況

森林・原野の割合が 70.0%で最も大きい。森林の所有形態を見ると、民有林の割合が大きい。

(6) 法規制

北陸圏には自然公園が 20 箇所 (233,680ha) あり、総面積の 18.5%を占める。自然公園の中では国立公園、都道府県立自然公園の占める割合が大きい。自然環境保全地域は 20 箇所指定されている。このほかにラムサール条約登録湿地が 2 箇所 (1,120ha) 指定されている。

5. 中部圏

(1) 位置および面積

中部圏は、本州のほぼ中央に位置しており、総面積は 42,892km² で、わが国総面積の約 11.4% に相当する。

(2) 地質・地形・気候

中部圏は、日本列島を形成する 3 つの島弧、東北日本弧、伊豆・小笠原弧、西南日本弧が会合する場である。山地の主体を占めており、山地の間に盆地が介在し高低の差が大きい。

基盤岩類の特性を見ると、飛騨山脈南部から美濃地域まで分布する美濃帯（主に三畳紀～ジュラ紀に堆積したチャート・泥岩・砂岩からなる）、木曾山脈、伊那谷周辺や三河高原に分布する領家帯（雲母片岩等の高温型の変成岩類と花崗岩類）、伊那谷東側と浜名湖北西に分かれて分布する三波川帯（泥質片岩・緑色片岩などからなる白亜紀の低音高圧型変成帯）、赤石山地の西部に三波川帯に沿って分布する秩父帯（非変成ないし弱変成の泥岩・砂岩）、赤石山地周辺に分布する四万十帯（白亜紀～古第三紀の主に砂岩と泥岩）などに区分される。

山間部は、内陸性気候に区分され、雨が少なく、夏と冬、昼と夜の寒暖差が大きい。太平洋側の地域は年間を通じて温暖であり、夏には多雨、冬には乾燥してよく晴れる。

(3) 植生

中部圏には、飛騨・木曾・赤石山脈などの高山帯から、盆地帯、太平洋側の平地まで様々なタイプがあり、標高差や地形によって植生の変化が見られる。

中部圏の植生区分別の出現頻度構成比をみると、山岳地の多い中部圏は、北海道に次いで高山帯や亜高山帯の植生が多く、全国の 23.0% にあたる寒帯・高山帯自然植生と 14.7% にあたる亜寒帯・亜高山帯自然植生、31.5% にあたる亜寒帯・亜高山帯代償植生が残されている。高山帯及び亜高山帯植生は、北アルプス、中央アルプス、南アルプスの脊梁山脈一帯に広く分布するほか、白山、妙高山、八ヶ岳、富士山及び三国山脈などに分布している。ブナクラス域の植生は、自然植生が 6.9%、代償植生は 17.2% 分布している。これらは、上記の亜高山帯の下部に分布するほか、朝日岳から越後山脈にかけての一带、佐渡、上信越の山地、能郷白山などに広くみられ、エゾイタヤシナノキ群落及び下部針広混交林が大半を占める北海道を除くと、東北地方に次いで多いが、その大半は代償植生である。ヤブツバキクラス域代償植生は 12.7% あり、伊豆半島、能登半島、美濃三河高原などに比較的広く分布する。天竜川流域を中心とする地域には植林地が多い。植林地・耕作地植生の構成比は 47.3% と高い。

中部圏に占める自然林、二次林のまとまりの割合は 9.3% と低いが、植林地を加えると 46.2% と高い値になる。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類等の分布を見ると、ニホンザルやカモシカ、クマ類の分布が確認された区域の割合が大きい。またイヌワシやクマタカなどの猛禽類の生息が確認される区域の割合も大きく、動物の生息・生育環境として重要な地域といえる。

(5) 土地利用現況

中部圏では、森林・原野の割合が70.6%で最も大きい。森林の所有形態を見ると、民有林の割合が大きい。

(6) 法規制

中部圏には、自然公園が59箇所(848,014a)あり、総面積の19.8%を占める。自然公園の中では国立公園、都道府県立自然公園の占める割合が大きい。また自然環境保全地域は47箇所指定されており、このうち大井川源流部は原生的自然環境保全地域に指定されている。このほかにラムサール条約登録湿地が1箇所(323ha)指定されている。

6. 近畿圏

(1) 位置および面積

近畿圏は、本州の中西部に位置しており、総面積は 27,330km² で、わが国総面積の約 7.2% に相当する。

(2) 地質・地形・気候

近畿圏は、その地形で大きく分けると、敦賀湾から伊勢湾にいたる線、琵琶湖から淡路島西岸にいたる線、南辺の中央構造線の 3 本のラインで囲まれる近畿三角帯、中央構造線の南側の紀伊山地、若狭湾から丹後山地・丹波高地、瀬戸内海側の播磨平野周辺の 4 つの区域に分けられる。

近畿三角帯は、南北に近い走向の山地、その間をうめる盆地列があり、中央部は笠置・信楽両山地からなる平坦な高原状になっている。この地域は、第四紀後期の地殻変動により形成されており、日本列島の中でも特に細かい地形単元に分かれている地域である。東は養老・鈴鹿・布引山地、西縁部には比良・比叡・六甲などの山地、南縁には和泉山脈、高見山地などが分布するが、いずれも延長が 20～50 km、標高も 800～1200m と小規模である。

紀伊山地は、急峻な山地斜面と深い峡谷で特徴付けられる。全体として中央部が盛り上がる曲隆山地であり、熊野川等の河川が四方に放射状に流れている。紀伊山地の北部隆起帯も、三波川帯・秩父帯・四万十帯の岩石で構成される。紀伊山地南部は、熊野酸性岩や中新世の堆積岩からなる。

丹波高地は、近畿三角帯の東縁を限る比良山地から、西に続く。全体としてゆるく西に傾き、由良川、保津川などが山地内を蛇行して峡谷を形成している。福知山盆地、加古川の低地をこえると高度が増し、中国山地に連なる。中国山地の非火山性の最高峰は氷ノ山であり、その北東には脊梁山地から日本海側に北東に張り出した丹後山地がある。また丹波高地周辺には瀬戸内海と日本海を結ぶ低地（氷上回廊）、篠山盆地などが分布する。

瀬戸内海側には、播磨平野が広がる。漸新世の神戸層群および鮮新～更新世の大阪層群を基盤とする、緩やかに西傾斜する東播磨丘陵、台地が分布し、西部では中・古生層または流紋岩を基盤とする低平な沖積低地が見られる。

北近畿は日本海側気候区、機内は瀬戸内海気候区に、南紀は太平洋側気候区に区分される。また京都府南部や奈良県北部は内陸性気候区に区分される。

(3) 植生

近畿圏は、日本海、瀬戸内海、太平洋に囲まれており、それぞれの気候特性を反映した植生タイプが分布している。

植生区分別の出現頻度構成比をみると、大都市圏を抱える近畿圏は、首都圏と同様に市街地などの占める割合が 10.9% と高い。近畿圏の中では、45.8% が植林地・耕作地植生で占められ、次いでヤブツバキクラス域代償植生が 35.0% と高い。ブナクラス域の植生は自然植生 1.5%、代償植生 4.9% と東日本に比較すると少ない比率となる。ブナクラス域の自然植生は大半がスズタケープナ群団であり、紀伊山地に多く分布する。

近畿圏に占める自然林、二次林のまとまりの割合は 8.3% と低いが、植林地を加えると 45.6%

と高い値になる。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類等の分布を見ると、ニホンザルやニホンジカの分布が確認された区域の割合が大きく、動物の生息・生育環境として重要な地域といえる。

(5) 土地利用現況

近畿圏では、森林・原野が 66.7%で最も大きい、宅地の 7.2%は首都圏に次いで大きい。森林の所有形態を見ると、民有林がほとんどである。

(6) 法規制

近畿圏には、自然公園が 50 箇所 (449,979a) あり、総面積の 16.5%を占める。自然公園の中では国定公園の占める割合が大きい。また自然環境保全地域は 31 箇所指定されている。このほかにラムサール条約登録湿地が 2 箇所 (66,176ha) 指定されている。

7. 中国圏

(1) 位置および面積

中国圏は、本州の西南方に位置しており、総面積は 31,913km² で、わが国総面積の約 8.4% に相当する。

(2) 地質・地形・気候

東西にのびる中国山地を中心に、南に吉備高原、北に石見高原、西に周防高原が分布する。この地域は、風化されやすい花崗岩が広く分布することから、浸食小起伏面の発達が著しい。

中国山地は、ほぼ中央部の江の川で分断され、東部と西部に分けられる。東中国山地は、さらに東半部（氷ノ山、那岐山）、西半部（道後山、吾妻山）に分けられ、三次・津山などの盆地や、吉備高原、石見高原が位置する。道後山の山頂部付近に模式的な侵食小起伏面が発達する。西中国山地は臥竜山から恐羅漢山、冠山から十方山にかけての山列が主部をなしている。

山陰地方は日本海側気候区、瀬戸内海に面した地域は、年間を通じて温暖・少雨である瀬戸内気候に属する。岡山県北部や広島県北部は内陸性気候区に区分される。

(3) 植生

中国圏は、比較的なだらかな中国山地を挟んで、日本海側の山陰と瀬戸内海に面する山陽に区分され、それぞれに特徴を持つ。例えば山陰はコナラ林が主体であり、山陽はアカマツ・クロマツ林が広く分布する。

中国圏の植生区分別の出現頻度構成比をみると、アカマツ林を初めとするヤブツバキクラス域代償植生の割合が 51.5% を占め、全国で最も高い地方であり、ほぼ全域にわたる広い範囲に分布している。一方、中国山地の一部には、わずかであるが氷ノ山・那岐や大山などにブナ自然林が残存しているほか、氷ノ山から道後山周辺、西中国山地にかけては、ミズナラ林などのブナクラス域代償植生が塊状に分布している。ブナクラス域植生のこの圏に占める割合は 6.6% であるが、ブナクラス域植生のうち代償植生の割合は 91.1% あり、他圏に比較するとブナクラス域の自然植生の割合がもっとも少なくなっている。

中国圏に占める自然林、二次林、植林地のまとまりの割合は 33.6% で比較的低い値であるが、自然林、二次林のまとまりの割合は 12.0% と平均的な値になっている。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類等の分布を見るとイノシシの分布が確認された区域の割合が大きく、動物の生息・生育環境として重要な地域といえる。

(5) 土地利用現況

中国圏では、森林・原野が 72.7% で四国圏に次いで大きい。森林の所有形態を見ると、民有林がほとんどである。

(6) 法規制

中国圏には、自然公園が 48 箇所 (250,742a) あるが、総面積の 7.9%を比較的低い割合である。また自然環境保全地域は 51 箇所指定されている。このほかにラムサール条約登録湿地が 3 箇所 (16,258ha) 指定されている。

8. 四国圏

(1) 位置および面積

四国圏は、本州中西部に位置し、三方が瀬戸内海や紀伊水道、豊後水道に囲まれている。総面積は18,801km²で、わが国総面積の約5.0%に相当する。

(2) 地質・地形・気候

四国圏は、大部分が急峻な山地であり、尾根や谷の走向は東西に近く、基盤岩類、地質構造をよく反映している。石鎚山(1,982m)付近の高所を除けば、全体としては標高500~1,000mの台状の山地であり、その中央を四万十川が蛇行しながら流下する。

四国山地の地質は、三波川帯、秩父帯、四万十帯に大別される。特に三波川帯は四国山地の席両部を構成する。また四国中部から紀伊半島西端部まで中央構造線が貫いており、地殻運動や地形形成に影響を与えている。

瀬戸内海側には、讃岐山脈北麓の扇状地性平野(高松平野、丸亀・坂出平野、三豊平野)、燧灘に臨む海岸平野(新居浜平野、道前平野、今治平野)、重信川がつくる扇状地性の松山平野などが広がる。

瀬戸内海に面した北側は、年間を通じて温暖・少雨である瀬戸内気候である。太平洋に面した南部は、黒潮の影響を受ける太平洋側気候区であり、温暖で年間降水量も多い。一方で台風の来襲や集中豪雨も多い。

(3) 植生

四国圏は、急峻な四国山地を挟んで、瀬戸内海側、太平洋側に区分され、それぞれの気候特性を反映した植生タイプが分布している。

植生区分別の出現頻度構成比をみると、植林地・耕作地植生が59.9%を占め、次いでヤブツバキクラス域代償植生が30.3%と多い。森林比率は高く、その大半は植林地やアカマツ林、シイ・カシ萌芽林などのヤブツバキクラス域代償植生である。しかし剣山、石鎚山などの山頂部には、シコクシラベやササ群落などの亜寒帯・亜高山帯自然植生が分布するほか、ブナ林も小規模ながら分布している。

四国圏に占める自然林、二次林、植林地のまとまりの割合は53.9%と最も高い値をとるが、自然林、二次林のまとまりの割合は4.2%と九州圏に次いで低い。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類や、猛禽類の分布が確認される地域は少ない。

(5) 土地利用現況

中国圏では森林・原野が74.4%で最も大きい。森林の所有形態を見ると、民有林の割合が大きい。

(6) 法規制

四国圏には、自然公園が 43 箇所（147,865ha）あり、総面積の 7.9%を占める。また自然環境保全地域は 9 箇所指定されている。

9. 九州圏

(1) 位置および面積

九州圏は、日本列島の南西部に位置する。総面積は 42,161km² で、わが国総面積の約 11.2% に相当する。

(2) 地質・地形・気候

九州圏は西南日本弧と琉球弧の接合部に立地する。九州の地形を特徴付けるのは、火山フロントと中央構造線の続きと考えられている横ずれ断層(臼杵―八代線)である。中部の阿蘇山以南には、非火山性の九州山地が連なり、火山を含む台地・丘陵地をなす地域との間に明瞭な境界線として臼杵―八代線が走っている。

この構造線と火山の分布によって北部、中部、南部に3区分できる。北部(筑紫山地と平野・盆地、西側の丘陵・低山地群、島嶼地域)は、西南日本内弧の延長部で、地形や地層も中国地方や朝鮮半島のそれに共通する特色を多く持っている。中部は、構造線以北の地域のうち火山が卓越する地域であり、九州を横断する火山性の別府―島原地溝帯、古い火山群、小規模な非火山生産地や筑紫平野・熊本平野などに大別できる。火山地域にはカルデラ、火砕流台地など様々な火山地形が発達する。南部は、九州山地、宮崎平野から大隈半島、種子島・屋久島までの西南日本外帯山地の特色を備えた岩石を基盤とする地域と、鹿児島地溝、肥薩・北薩火山地域～薩摩半島等の火山地域に分けられる。

南部の太平洋沿岸に当たる宮崎県・鹿児島県は、夏に降水量が多い太平洋側気候区で、台風の来襲も多い。有明海沿岸や瀬戸内海沿岸は瀬戸内海式気候で、一年中降水量が比較的少ない。また福岡市など玄界灘沿岸の日本海側では、日本海側気候区であり、冬は降水量が比較的多いが、年間降水量が少ない。奄美諸島以南の地域は、南西諸島の気候で、年間降水量は2000mm以上と多い。年間の気温の差が小さく1年を通して気温が高い。

(3) 植生

九州圏には、九州山地などの山地帯から、複雑な海岸線をもつ半島部、南西部の島嶼地域など、様々な環境がある。

九州圏の植生区分別の出現頻度構成比をみると、植林地・耕作地植生の割合が62.6%あり、全国で最も高い。ブナクラス域自然植生は1.1%とわずかであるが標高の高い久住山、祖母山、傾山から九州中央山地にかけての帯及び霧島山に分布している。ヤブツバキクラス域自然植生は6.9%残され、スダジイ、イチイガシなどの照葉樹林が日豊海岸、宮崎県北部一帯、大森岳を中心とする綾川上流域、鰐塚山地、出水山地から薩摩半島、大隅半島、甑島列島、奄美大島などに分布しているが、個々の群落はあまり広くない。一方、屋久島のスギ自然林は大面積で残されており特異である。ヤブツバキクラス域代償植生は19.9%あり、植林地・耕作地植生の3分の1以下となっている。

九州圏に占める自然林、二次林、植林地のまとまりの割合は32.0%と沖縄県に次いで低い値をとる。自然林、二次林のまとまりの割合は2.6%と最も低い。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類等の分布を見るとイノシシの分布が確認された区域の割合が大きく、動物の生息・生育環境として重要な地域といえる。

(5) 土地利用現況

九州圏では森林・原野が 64.0%で最も大きいのが、農用地も 14.9%を占めている。森林の所有形態を見ると、民有林の割合が大きい。

(6) 法規制

九州圏には、自然公園が 71 箇所 (693,473ha) あり、総面積の 16.4%を占める。自然公園の中では都道府県立自然公園の占める割合が大きい。また自然環境保全地域は 37 箇所指定されており、このうち屋久島には原生的自然環境保全地域が指定されている。このほかにラムサール条約登録湿地が 3 箇所 (161ha) 指定されている。

10. 沖縄県

(1) 位置および面積

沖縄県は日本の南西端に位置する。総面積は2,268km²で、わが国総面積の約0.6%に相当する。

(2) 地質・地形・気候

沖縄県を含む南西諸島の主体部は、火山フロントを境として、東側の琉球外弧隆起帯と、西側の琉球内弧隆起帯に分かれる。南西諸島の島々の大部分がこれら両帯に存在する。

南西諸島は広く石灰岩に覆われている。多雨な気候下であるために有機物の活発な分解が進み、炭素ガス分圧が高く、本土の石灰岩に比べて溶食作用が促進され、沖縄島、宮古島、石垣島などで円錐カルストが発達している。沖縄島北部などの非石灰岩地域の基盤岩類は、水や炭酸ガス、酸素などの働きで化学的風化が進行し、厚さ数10mにも達する厚い風化層が形成されている。

沖縄県を含む南西諸島は、亜熱帯気候に属する。特に5～6月には梅雨や台風の来襲などにより多量の降雨がある。

(3) 植生

沖縄県は、亜熱帯に位置し、複雑な地形、地質などの環境条件と相まって、多様で豊かな自然環境が形成されている。とりわけ沖縄島北部地域や八重山地域等の山地部ではイタジイを中心とする自然度の高い照葉樹林が広がり、その多様性・特異性に富む生物相は貴重な価値を持つとされる。

沖縄県の植生区分別の出現頻度構成比をみると、自然植生の占める割合が高く44.0%あり、北海道に次いで多い。沖縄本島北部及び西表島には大面積のヤブツバキクラス域自然植生が分布しており、照葉樹林のほか、マングローブ林等亜熱帯性の植生も分布している。また河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生は2.4%あり、大規模湿原などがみられる北海道(1.0%)の構成比率と比較しても際立って高い比率となっている。

沖縄圏には植林地がほとんどないため、自然林、二次林、植林地のまとまりの割合、自然林、二次林のまとまりの割合はそれぞれ19.4%、16.8%でほとんど変わらない。

(4) 動物分布状況

大型哺乳類や、猛禽類の分布が確認される地域は少ない。

沖縄県の動物相は、熱帯から温帯にかけてのものが主体となっており、日本本土にみられない南方系で暖地性のももみられる。また琉球列島には固有種・固有亜種が多い。

(5) 土地利用現況

沖縄県では森林・原野が46.8%と比較的小さく、農用地が21.4%と他の圏と比べると最も大きい。

(6) 法規制

沖縄県には、自然公園が71箇所(693,473ha)あり、総面積の16.4%を占める。また自然環境

保全地域は37箇所指定されている。自然環境保全地域の占める割合は0.4%であり北海道に次いで大きい。このほかにラムサール条約登録湿地が3箇所(568ha)指定されている。

表 1：広域圏計画区域別の面積割合

広域圏計画 区域名	面積(km ²)	国土に占める 面積割合
(北海道)	83,452	22.1%
東北圏	79,469	21.0%
首都圏	36,886	9.8%
北陸圏	12,620	3.3%
中部圏	42,892	11.4%
近畿圏	27,330	7.2%
中国圏	31,913	8.4%
四国圏	18,801	5.0%
九州圏	42,161	11.2%
(沖縄)	2,268	0.6%
全国	377,791	100.0%

『土地利用現況把握調査（平成 11 年度実施分）』（H10. 10. 1 現在）より作成。

表 2：広域圏計画区域別の植生区分の割合

広域圏計画 区域名	ブナクラス 域自然植生	ブナクラス 域代償植生	ヤブツバキ クラス域自 然植生	ヤブツバキ クラス域代 償植生	亜寒帯・亜 高山帯自然 植生	亜寒帯・亜 高山帯代償 植生	河辺・湿原・ 沼沢地・砂 丘植	寒帯・高山 帯植生	植林地・耕 作地植生	その他	合計
(北海道)	33.2%	9.1%	0.0%	0.0%	13.8%	1.0%	1.0%	0.9%	37.9%	3.1%	100.0%
東北圏	13.4%	23.5%	0.7%	9.1%	1.5%	0.1%	0.5%	0.2%	45.7%	5.2%	100.0%
首都圏	4.3%	8.9%	0.5%	12.0%	2.9%	0.2%	0.8%	0.1%	54.1%	16.2%	100.0%
北陸圏	10.9%	15.5%	0.7%	23.7%	4.2%	0.0%	0.4%	1.0%	37.2%	6.5%	100.0%
中部圏	6.9%	17.2%	0.5%	12.7%	4.8%	0.9%	0.2%	0.6%	47.3%	9.0%	100.0%
近畿圏	1.5%	4.9%	1.3%	35.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	45.8%	10.9%	100.0%
中国圏	0.6%	6.0%	0.5%	51.5%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	35.9%	5.3%	100.0%
四国圏	1.5%	1.7%	1.6%	30.5%	0.0%	0.1%	0.2%	0.0%	59.9%	4.6%	100.0%
九州圏	1.1%	1.2%	6.9%	19.9%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	62.6%	7.8%	100.0%
(沖縄)	0.0%	0.0%	44.0%	8.1%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	35.6%	9.9%	100.0%

注) 第 5 回自然環境保全基礎調査植生調査報告書（1999）環境省自然環境局より作成。

3 次メッシュ（1km×1km）単位で算出。

表 3：植生区分別の広域圏計画区域の割合

広域圏計画 区域名	ブナクラス 域自然植生	ブナクラス 域代償植生	ヤブツバキ クラス域自 然植生	ヤブツバキ クラス域代 償植生	亜寒帯・亜 高山帯自然 植生	亜寒帯・亜 高山帯代償 植生	河辺・湿原・ 沼沢地・砂 丘植	寒帯・高山 帯植生	植林地・耕 作地植生	その他
(北海道)	60.0%	17.1%	0.0%	0.0%	68.7%	57.1%	39.5%	52.0%	18.1%	9.8%
東北圏	23.2%	42.5%	10.2%	12.4%	7.1%	5.7%	19.0%	12.8%	20.9%	15.7%
首都圏	3.3%	7.2%	3.1%	7.3%	6.2%	4.4%	13.3%	3.2%	11.0%	21.9%
北陸圏	3.0%	4.4%	1.7%	5.1%	3.2%	0.0%	2.3%	9.0%	2.7%	3.1%
中部圏	7.7%	20.2%	4.9%	11.2%	14.7%	31.5%	5.9%	23.0%	14.1%	17.7%
近畿圏	0.8%	2.9%	6.4%	15.3%	0.0%	0.2%	5.4%	0.0%	6.7%	10.6%
中国圏	0.4%	4.1%	3.0%	26.3%	0.0%	0.0%	2.4%	0.0%	6.2%	6.0%
四国圏	0.6%	0.7%	5.1%	9.1%	0.0%	1.2%	1.6%	0.0%	6.0%	3.0%
九州圏	0.9%	1.1%	49.9%	13.1%	0.0%	0.0%	8.6%	0.0%	13.9%	11.5%
(沖縄)	0.0%	0.0%	15.8%	0.3%	0.0%	0.0%	2.2%	0.0%	0.4%	0.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

第 5 回自然環境保全基礎調査植生調査報告書（1999）環境省自然環境局より作成。

3 次メッシュ（1km×1km）単位で算出。

表 4：広域圏計画区域に占めるまとまった森林の割合

広域圏計画区域名	自然林、二次林、植林地の まとまり	自然林、二次林のまとまり
(北海道)	44.4%	21.9%
東北圏	42.5%	14.1%
首都圏	28.2%	5.6%
北陸圏	46.8%	20.6%
中部圏	46.2%	9.3%
近畿圏	45.6%	8.3%
中国圏	33.6%	12.0%
四国圏	53.9%	4.2%
九州圏	32.0%	2.6%
(沖縄)	19.4%	16.8%
総計	40.9%	12.6%

注) 第5回自然環境保全基礎調査植生調査結果(環境省自然環境局, 2001)より作成。
3次メッシュ(1km×1km)単位で算出。

表 5：動物分布が確認された地域に占める広域圏計画区域の割合

広域圏計画区域名	クマ類(ツキノ ワグマ・ヒグマ)	カモシカ	ニホンジカ	ニホンザル	イノシシ
(北海道)	31.6%	0.0%	42.2%	0.0%	0.0%
東北圏	31.5%	55.1%	1.2%	10.1%	4.1%
首都圏	8.3%	8.4%	6.7%	14.6%	7.1%
北陸圏	5.7%	6.6%	1.3%	4.2%	2.6%
中部圏	15.3%	19.7%	12.0%	27.2%	18.2%
近畿圏	4.2%	7.7%	14.7%	16.9%	16.7%
中国圏	3.3%	0.0%	3.9%	9.3%	20.5%
四国圏	0.2%	1.2%	4.3%	8.9%	9.2%
九州圏	0.0%	1.2%	13.4%	8.7%	20.7%
(沖縄)	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	1.0%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注) 第2回・第6回自然環境保全基礎調査動物分布調査結果(環境省自然環境局, 2001)より作成。
第2回(1978年)、第6回(2003年)の両調査において対象種の生息が確認された区域を対象。
2次メッシュ(10km×10km)単位で算出。

表 6：猛禽類の生息が確認された地域に占める広域圏計画区域の割合

広域圏計画区域名	イヌワシ					クマタカ	
	生息確定 (メッシュ数)	生息推定 (メッシュ数)	一次滞在 (メッシュ数)	総計 (メッシュ数)	割合	生息確認 (メッシュ数)	割合
(北海道)	18	0	0	18	2.3%	124	8.8%
東北圏	33	12	24	367	47.4%	392	28.0%
首都圏	56	5	14	75	9.7%	108	7.7%
北陸圏	53	1	6	60	7.8%	81	5.8%
中部圏	110	38	3	151	19.5%	211	15.0%
近畿圏	32	19	6	57	7.4%	185	13.2%
中国圏	21	5	2	28	3.6%	107	7.6%
四国圏	1	0	0	1	0.1%	70	5.0%
九州圏	13	4	0	17	2.2%	124	8.8%
(沖縄)	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%
合計	635	84	55	774	100.0%	1402	100.0%

注) 環境省自然環境局野生生物課資料より作成。2次メッシュ(10km×10km)単位で算出。
オオタカの分布については「日本におけるオオタカの生息分布(1996年～2000年)」(環境省生物多様性センター資料)を参考とした。

表 7：各広域ブロックに占める土地利用現況別の割合

広域圏計画 区域名	宅地	農用地	森林・ 原野	その他	合計
(北海道)	1.3%	14.7%	68.9%	15.1%	100.0%
東北圏	3.2%	14.1%	70.5%	12.2%	100.0%
首都圏	11.9%	18.9%	48.2%	20.9%	100.0%
北陸圏	5.0%	12.2%	70.0%	12.9%	100.0%
中部圏	6.2%	9.9%	70.6%	13.3%	100.0%
近畿圏	7.2%	9.2%	66.7%	16.8%	100.0%
中国圏	3.9%	9.1%	72.7%	14.3%	100.0%
四国圏	3.5%	8.8%	74.4%	13.3%	100.0%
九州圏	5.2%	14.9%	64.0%	16.0%	100.0%
(沖縄)	6.0%	21.4%	46.8%	25.7%	100.0%
総計	4.6%	13.3%	67.2%	14.9%	100.0%

注) 国土交通省土地・水資源局「土地利用現況把握調査(平成11年度実施分)」(H10.10.1現在)より作成。
森林・原野=森林+原野、その他=水面・河川・水路+道路+その他

表 8：平成17年産水稻の作付面積と割合

広域圏計画区域名	面積(ha)	割合
(北海道)	119,100	7.0%
東北圏	563,900	33.1%
首都圏	275,141	16.2%
北陸圏	96,600	5.7%
中部圏	145,800	8.6%
近畿圏	116,670	6.9%
中国圏	121,600	7.1%
四国圏	59,500	3.5%
九州圏	202,200	11.9%
(沖縄)	1,060	0.1%
総計	1,701,571	100.0%

注) 農林水産省大臣官房統計部資料(10月15日現在)より作成。

表 9：ラムサール条約登録湿地の指定状況

広域圏計画区域名	箇所	面積(ha)
(北海道)	12	35,015
東北圏	4	1,280
首都圏	3	9,011
北陸圏	2	1,120
中部圏	1	323
近畿圏	2	66,176
中国圏	3	16,258
四国圏	0	0
九州圏	3	161
(沖縄)	3	568
総計	33	129,912

注) 環境省資料より作成(平成18年1月現在、33箇所)
尾瀬(8,711ha)は東北圏(新潟県、福島県)、首都圏(群馬県)にまたがるがここでは首都圏として集計。

表 10：各広域圏計画区域における自然公園の指定状況

広域圏計画区域名	自然公園							
	箇所	面積(ha)	国立公園		国定公園		都道府県立自然公園	
			箇所	面積(ha)	箇所	面積(ha)	箇所	面積(ha)
(北海道)	23	864,147	6	506,378	5	212,359	12	145,410
東北圏	89	1,121,958	12	354,530	16	332,938	61	434,490
首都圏	65	722,237	11	401,374	7	81,145	47	239,718
北陸圏	20	233,680	4	110,114	5	34,375	11	89,191
中部圏	59	848,014	10	331,559	12	162,281	37	354,174
近畿圏	50	449,979	6	63,957	13	207,405	31	178,617
中国圏	48	250,742	7	58,124	10	77,458	31	115,160
四国圏	43	147,865	5	39,867	6	37,874	32	70,124
九州圏	71	693,473	10	185,660	17	185,252	44	322,561
(沖縄)	6	36,658	1	13,547	2	13,413	3	9,698
総計	392	5,368,753	28	2,065,110	55	1,344,500	309	1,959,143

注) 環境省資料「自然保護各種データ一覧」より作成 (H18.3.31現在の数値)
箇所数の総計は各区域の合計値と一致しない。

表 11：各広域圏計画区域における自然環境保全地域の指定状況

広域圏計画区域名	自然環境保全地域			
	保全地域		特別地域	
	箇所	面積(ha)	箇所	面積(ha)
(北海道)	7	5957.83	7	3033.47
東北圏	127	23928.65	90	7784.71
首都圏	196	26702.2	53	4739.44
北陸圏	20	1947.4	15	1208.96
中部圏	47	9524.64	43	4939.2
近畿圏	31	1079.99	15	522.22
中国圏	51	2487.89	49	1498.33
四国圏	9	2046.09	9	563.76
九州圏	37	1715.9	27	845.28
(沖縄)	11	950.79	7	154.61
総計	536	76341.38	315	25289.98

注) 環境省資料「自然保護各種データ一覧」より作成 (H18.3.31現在の数値)
箇所数の総計は各区域の合計値と一致しない。

表 12：各広域圏計画区域に占める自然公園、自然環境保全地域の割合

広域圏計画区域名	自然公園			自然環境保全地域		
	国立公園	国定公園	都道府県立自然公園	特別地区		
(北海道)	10.4%	6.1%	2.5%	1.7%	0.1%	0.0%
東北圏	15.0%	4.7%	4.4%	5.8%	0.3%	0.1%
首都圏	19.9%	11.0%	2.2%	6.6%	0.7%	0.1%
北陸圏	20.9%	9.9%	3.1%	8.0%	0.2%	0.1%
中部圏	20.7%	8.1%	4.0%	8.6%	0.2%	0.1%
近畿圏	16.6%	2.4%	7.6%	6.6%	0.0%	0.0%
中国圏	7.9%	1.8%	2.4%	3.6%	0.1%	0.0%
四国圏	7.9%	2.1%	2.0%	3.7%	0.1%	0.0%
九州圏	17.4%	4.7%	4.6%	8.1%	0.0%	0.0%
(沖縄)	16.1%	6.0%	5.9%	4.3%	0.4%	0.1%
総計	14.6%	5.6%	3.7%	5.3%	0.2%	0.1%

注) 環境省資料「自然保護各種データ一覧」より作成
自然公園、自然環境保全地域ともにH18.3.31現在の数値である。

参考資料

全体>

- ※ 農林水産統計：農林水産省大臣官房統計部（H17.10.28公表）
- ※ 地質・地形：東京大学出版会（2003）「日本の地形」シリーズ, 1～7
- ※ 気候：中村和郎他（1986）日本の気候, 岩波書店
- ※ 植生：宮脇昭編（1977）日本の植生, 学習研究社
：第4回自然環境保全基礎調査植生調査報告書（1997）環境省自然環境局
- ※ 動物分布状況：第2回・第6回自然環境保全基礎調査植生調査報告書（1978, 2003）環境省自然環境局
- ※ 自然環境保全関連の法規制：環境省資料

広域圏別>

- ※ 北海道環境白書 '06
- ※ 首都圏の都市環境インフラのランドデザイン（2004）自然環境の総点検等に関する協議会
- ※ 各都道府県の環境基本計画や自然環境情報等